

部屋は、静かだった。冷蔵庫の低い唸りと、ガムテープを引き出す音だけが、夜更けのリビングに響いている。

ぼくは床に座り、段ボール箱の蓋を閉じた。側面には、震える字で「仕事道具」と書いてある。明日の朝、友人が車で迎えに来てくれることになっていた。

隣には、まだ蓋を閉じていない衣類の箱がある。いちばん上に置いたボクサーパンツを見て、慌ててタオルの下へ押し込んだ。今は誰もいない。それでも、下着を見るだけで、自分の身体を誰かに覗かれているような気持ちになった。

ぼくは男だ。見た目も、声も、心も、ずっと男として生きてきた。

ただ、生まれつき下半身に男性器がない。その代わり、脚の間には女性と同じ性器がついている。

そういう身体を、カントボーイと呼ぶ人もいるらしい。

その身体が、ずっと嫌だった。

他人と風呂に入ったことはない。着替えは必ず個室を使い、恋人も作らなかった。男として近づいてきた相手に身体を知られ、男として見てもらえなくなることも、気味悪がられることも怖かったからだ。家族と医師以外には、誰にも見せたことがない。

在宅で働くようになったのも、人付き合いが苦手だからというだけではなかった。誰にも身体を知られずに済む生活が、ぼくにとっていちばん安全だった。

（あと少し……。朝までに、必要なものだけまとめないと……）

この部屋から出る。

昨夜、その決心をした。

最初は、ほんの小さな違和感だった。机の上へ置いたはずのペンを、別の場所にある。買ったばかりの歯ブラシが、なぜか少し濡れている。冷蔵庫には、自分で買った覚えのないプリンが入っていた。

疲れているせいだと思った。仕事に追われ、記憶

が曖昧になっているだけ。そう言い聞かせた。

けれど、一週間前から、差出人のないメッセージが届くようになった。

『今日は白いシャツなんだね』

『夕食、それだけで足りる？』

『また眠れないの？』

どれも、ぼくの姿を見ていなければ書けない内容だった。

カーテンを閉め、外出を控えた。それでも、メッセージは止まらなかった。

そして昨夜、とうとう写真が送られてきた。

自分のベッドで眠っている、ぼくの写真。室内から撮られたものだった。

（誰かが、この部屋に入ってた……。ぼくが眠っている間に……）

考えるだけで、背中が冷たくなる。

警察には、朝になったら友人と一緒にいくことになっていた。それまでは玄関の鍵をかけ、チェーンも外さず、誰が来ても絶対にドアを開けない。

そう決めていた。

スマートフォンが震えた。

びくっと肩が跳ねる。恐る恐る画面を見ると、友人からのメッセージだった。

『朝七時に着く。着いたら電話するから、それまで絶対に外へ出るなよ』

短く返事を打つ。スマートフォンを伏せたところで、玄関から物音がした。

コンコン、と二回。

少し間があって、もう一度、コンコンと鳴る。

「……っ」

息を殺した。

こんな時間に訪ねてくる相手などいない。宅配便

も頼んでいない。インターホンの画面を見る勇気も出ず、その場でじっとしていた。

「橘くん。起きてる？」

聞き覚えのある、低く穏やかな声だった。

「……久世、さん？」

同じマンションに住む、久世発真。

エントランスで会えば挨拶をして、重い荷物を持っていると部屋の前まで運んでくれる。人付き合いが苦手なぼくにも、近づきすぎない距離で接してくれる人だった。

このマンションで唯一、顔を見れば少し安心できる相手だった。

「廊下に、これが落ちてたよ」

インターホンの画面をつける。コート姿の久世さ

んが、カメラへ一本の鍵を見せていた。青いキーカバーには見覚えがある。ぼくの部屋の鍵だった。

「え……」

慌ててポケットを探る。鍵は、そこに入っていた。

（じゃあ、あれは……合鍵……？）

心臓が大きく跳ねた。

「久世さん、それ……どこで……」

「話すから、少し開けてくれる？」

「でも……」

「怖いことがあったんだよね」

「……どうして、それを……」

「廊下で何度か会ったけど、ずっと顔色が悪かったから。心配してた」

優しい声だった。